

第二分科会

【司会：富田】

本分科会は精神的、物理的に自然と乖離した日常生活、学校生活を過ごすことが多い児童、生徒たちに、どのように自然を身近に感じたり、関わったりしたらよいのか、また、自然と日常の暮らしの繋がりに気づく教育活動などをどのように展開したらよいのかについて情報交換、意見交換をする機会としたいと思います。

始めにご助言をいただく方々よりご挨拶をいただきます。

【宮城県森林インストラクター協会 日下前会長】

宮城県森林インストラクター協会の日下と申します。東日本大震災後は、環境教育防災林づくりに取り組みました。現在は、学校の森やE S Dの森とかかわり、森林での活動を通じ、森林について興味を持ち、森林を学び、森林を活用したりしながら、子ども達に生きる力をどうつけるのかについて、学校の先生方と連携・協力しつつ取り組んでいるところです。今日の分科会で、私たち森林にかかわるNPOと学校教育がどうかかわればよいのか、学びたいと思っております。よろしく願いいたします。

【林野庁 林室長】

全国国土の2割が国有林であって、その国有林でのレクリエーション、環境教育ということを担当している部署に所属しており、今日は皆さまのお話を参考にさせていただき、国有林を活用した教育の推進を行っていききたい。

個人的なことではあるが、大阪に生まれ、まったく森のない環境で幼少期を過ごしてきた。小学校のときを振り替えると、森の中で授業を受けた経験はない。今日の発表は小学校での森を授業で活用した取り組みを聞いて、大変嬉しく思っています。

【全国小学校理科研究協議会 林田事務局長】

私は、普段、江戸川区の小学校に所属しており、地域に森があるわけではない。しかし、当校では環境学習として、カブトムシを育てるなどの取り組みを行っています。今日は大変参考になる取り組みを聞くことができたと思っています。

【由木西小学校 那須校長先生】

本日は様々な行事の関係もあり本校の生徒を連れてくることができなかったが、夏に開催された学校の森サミットに参加させていただき、このような機会を通じて子どもたちが本心に成長する姿を目の当たりにしました。

今日の発表をお聞きして気が付いたのは、多摩川を通じて、豊ヶ丘小学校と当校はつながっていると感じた。

【司会：富田先生】

本日は、各学校での「学校の森」が目指すところを、各先生の立場からお伺いしたいと思います。では、南材木町小学校の横山校長先生宜しくお願いします。

【南材木町小学校 横山校長先生】

私の前任地は本日発表を行った泉松陵小学校でした。現在の学校に転勤してきて、ケヤキ山での活動と比較して、自然体験が少ない子どもたちに、校庭の木を使いながら何とか“自然を経験させたい”という気持ちから始まった取り組みです。

初年度はカリキュラムが決まっていたので、3～4年生は理科教育の発展という整理で、6時間程度の学習を実施。また5年生は、もともとのカリキュラムで環境教育の時間があり、学校の近くにある広瀬川の学習を行っていましたが、広瀬川は安全面を考えると、子どもたちだけではいけない場所となっていたので、この時間に割り込ませようとしたが初年度は困難であった。

活動2年目からは、現在のように校庭の木を活用した学校の森の活動を行うという指針が固まり、授業で取り組むことになりました。昨年、宮城県森林インストラクターの方が大きく関わりをもって取り組んでいってくれたことで、学校の森の雰囲気はすごくよくなりました。

学校の森の整備が進んだことで、今年からは1年生、2年生も生活科の時間を活用し、虫探しを行っています。本校では、1年～5年生までが、何らかの形で関わることになりました。

本校はこういった活動に力を入れており、このような自然環境の中での活動を通じて、この子には「こんな側面があるのか」「こんなに一生懸命取り組むのか！」という部分がすごく見えるようになってきており、このことは我々教員、保護者の方々にとっても楽しみなことです。今年、5年生では10時間を授業として活用していますが、森と関わるということでは30時間を超えているのではないかと思います。子どもたちにとって学校の森は大切な場所となっている。

【司会：富田先生】

自然とかい離した都会の日常の中というテーマに沿ったコメントをいただきありがとうございます。次は豊ヶ丘小学校小林校長先生お願いします。

【豊ヶ丘小学校 小林校長先生】

本校では、4～6年生が年間70時間を総合学習で活用しており、子どもたちが主体的に取り組めるESDの視点を持たせた取り組み、教員はファシリテーターに徹している。

他校の発表もお聞きしましたが、私たちの学校の取り組みは、インストラクターに何かやってもらおうとか、教員が何かを教えるということがベースにあるわけではなく、子どもたち

が主体となり、遊び・活動する中で学習を進めている。

例えば、台風での倒木の発生では、初めは「台風は怖い」というところから始まったが、それは「マツクイムシが入っていて健康な木ではなかったから折れた」という結論を子どもたちが出せるようになった。

子どもたちの合意形成とかゴールイメージをどう持っていくのかということに力を注いでおり、45分の1コマの授業であっても、子どもたち自身がやることがわかっているので、やることをやって活動から帰ってくる。そしてまた、やったことをプロデュースするということを繰り返しています。

さて、このような発信の場というのは非常に大きな意味を持つのだと考えております。発信があつて振り返ることで、自分自身が自信を付けたり、価値づけたりすることができる。それは教科学習においても、教員が生徒たちの考え・行動における些細なことでも気が付くことの重要性をしっかりと話し合ってきた。また子どもたちもこのような学習を通じて変化してきたと感じています。

多摩も本校と同じように課題に直面しています。「愛でる緑から、関わる緑へ」ということをコンセプトにした緑のルネッサンスを打ち出している。

その考えは、学校林の中でも同じだと気が付くことが出来たということは大きなことです。

【田上小学校 梨野先生】

本校はESDという言葉を生徒に詳しくは教えていないが、1年生からESDファイルというものを各自が持っています。

地域からお声掛けいただき、そして金沢大学からの予算もあり、自然学校という活動が始まった。地域の方が関わってくれたことで取り組みを始められました。

児童数も増えて全校では750名、6年生は120名がいるなかで、本日の発表に4名をどのように選ぶのかということに悩み、キタダンに対する意見文を生徒に書かせた。今日の発表は子どもたちの想いが沢山詰まった内容となっています。

【泉松陵 阿部先生】

ケヤキ山が活動の主体となっており、5年前に活動が始まりました。宮城県森林インストラクターの方々と協力して活動を続けています。子どもたちがどのような活動がしたいのかということ悩みながら取り組んできた。

正直なところ、ケヤキ山は大きな山でないので、やり尽した感じがあつたが、そこから学習を発展させ「ケヤキ山をまもっていくためにはどうするか？」という視点で取り組みを継続している。本日の発表は宮城県森林インストラクターと協力した活動を抜粋して発表を行いました。他にも地域の大学と協力して、ケヤキ山の枝などを活用した炭焼き体験も行ったりしています。

また、子どもたちの中からはケヤキ山でライブ活動をやりたいという子どもたちができ

て、毎日練習にケヤキ山を活用している。学校に山があることは幸せなことで子どもたちに伝えながら活動を続けています。

【下橋中学校 佐々木先生】

県庁所在地にある中学校だが、川や森を身近に感じる事が出来る立地にあります。環境教育を始めたのは20年位前からとなりますが、1年生の体験活動から3年生の森と海の繋がりということまでを広く捉えさせたいということを考えてやっている。最終的には、3年生でレポートを書き、どのようにしていきたいかということを書いてもらう。課題としては、この活動をどのように発展させていくのかということにあります。

また、学校の生徒会主導で、「環境とエコ（活動）の学校」という視点で様々な活動に主体的に取り組み、生徒が主体的に考え行動している。

【司会：富田先生】

環境として似ているのは、下橋中学校と南材木町小学校で、両校とも市街地に囲まれている。豊ヶ丘小学校、泉松陵小学校は学校林などの森をもっているということ。田上小学校は、水田を通じてかつて地域で展開されていた暮らし、環境を復活させていこうという活動をされています。以上の5つの学校から発表を頂きましたが、意見交換やご質問はありますか。

【全国小学校理科研究協議会 林田事務局長】

教育現場というのは子どもたちを如何に成長させていくかというミッションを持っている。それは発表にも表れていました。しかし、学んだけれど、成長がなかったということに陥りがちなことが多々ある。

今回だと、豊ヶ丘の取組みは子どもたちを様々なところにつれていき、アウトプットさせている。このことは素晴らしいと感じました。

【司会：富田先生】

このようなご意見を頂戴しましたが、豊ヶ丘小学校からそのことについてお話を更にお願ひできますか。

【豊ヶ丘小学校 小林校長先生】

本校は、問題解決型の学習を重んじています。例えば学習発表会も、何を発表するのかということも子どもたちに主体的に考えさせている。そして、誰にどんなことを伝えたいかということから考え、発表の方法も教えることなく、子どもたちに一から考えさせた。

何でこういうことができたのかというと、まとめ・表現するということをすごく大切に取り組んだ。そのことで、自慢したくて仕方がない子どもたちに育ってくれた。

発表する場がまた年度末にあるが、お客様にも体験してもらおうということなど、さらにどのようにすればよりこの取組みを更によくできるのかということを意識的に行う。

【全国小学校理科研究協議会 林田事務局長】

社会へのアウトプットという意味でエコプロダクトの話があったがそれはどのような目的なのか。

【豊ヶ丘小学校 小林校長先生】

発表会などを始めとした出来上がった発表、つまり「きれいに出来るか」ではなく、子どもたちがどのように伝えるかということに視点を持っている。

エコプロダクトでの話をすると、子どもたちに与えられた時間は3時間程度で、休み時間などで代用した。本番では、お客様からどのようにすればもっと良くなるのかということに対してアドバイスをもらったりして、子どもたちは新たな気づきがあった。

【司会：富田先生】

発信というアウトプットを大切にすることとはこの場でのキーワードとして共通認識としたい。

【南材木町小学校 横山校長先生】

自然環境学習により、インプットされた情報は、子どもの中で図工や音楽という他の学習の場面で表現できるのではないかと思う。すぐに何かに役立つということではなく、この経験が大人になったときの成長の在り方がことになっていくということにあるのではないか。

【司会：富田先生】

インプットがアウトプットにつながるのではないかという視点でお話をもらいました。しかもアウトプットをする際に、メタ認知という子どもたちが自分自身どういう状況なのかが判断できるようなところまで発達してきている。

また、自分から企画していくこと、主体的に出来るようになってきている。主体性、協働性という2つのキーワードがアクティブラーニングとして重要視されている。今日の分科会では、そこにもつながることが発表することで培われていく。そしてそのためにはインプットが大切だという道筋がついたと思います。いろいろな発表の場がありますので、各校で積極的にご参加されてはどうかということも分科会の大切な共通理解点となったと考えています。